

## 3. 医学部

I	医学部の教育目的と特徴	3-2
II	分析項目ごとの水準の判断	3-4
	分析項目 I 教育の実施体制	3-4
	分析項目 II 教育内容	3-6
	分析項目 III 教育方法	3-9
	分析項目 IV 学業の成果	3-11
	分析項目 V 進路・就職の状況	3-13
III	質の向上度の判断	3-16

## I 医学部の教育目的と特徴

徳島大学医学部では、医療・栄養・福祉に係る教育、研究、診療を通じて、社会に貢献できる人材育成を目的とする。

また、特徴として、医学科、栄養学科、保健学科の3学科間で、講義における教員の相互乗り入れ、講義室・講義資材・機材の共同利用、チーム医療を目指した学生合同ワークショップなど、3学科の利点を活かした教育編成を特徴としている。

設置された3学科ごとの目的と特徴は以下のとおりである。

### 【医学科】

- 1 医学科は、徳島県下唯一の医師養成機関として基本的な臨床能力及び基礎的な医学研究能力を備え、生涯にわたり医療、教育、保健・福祉活動を通じて社会に貢献し、医学の発展に寄与することができる人材の育成を目的とする。
- 2 教育の特徴として、平成14年に医学部教育支援センターを設置し、兼任の教員4名(うち1名は、主にセンター業務に従事)、事務補佐員2名を配置し、各分野の教育主任及び学務課第一教務係と連携を図りながら、チュートリアル教育支援、全国共用試験(Computer Based Testing:CBT及びObjective Structured Clinical Examination:OSCE)支援のみならず、学年ごとに教育に関する指導・生活指導を含めた支援を行っている。
- 3 平成19年度から新カリキュラムに移行することにより、外国人教員による医学英語教育の充実、3年次後期からの研究室配属による医学研究実習の長期化と指導の充実、臨床実習前教育の充実、従来の臨床実習(クリニカルクラークシップ)のより診療参加型化を図っている。
- 4 平成18-20年度の現代GPプログラム「医療系学生の保育所実習による子育て支援」に採択されている。また、平成18年度文部科学省・大学教育の国際化推進プログラム「国際感覚を育む統合的な医療人教育の推進」にも採択されている。
- 5 本学部の各学科間はもちろんのこと、同じキャンパス内の歯学部、薬学部とはヘルスバイオサイエンス研究部医療教育開発センターの協力の下に、学部横断的な共同講義を実施している。

### 【栄養学科】

- 1 栄養学科は、栄養学科の教育理念「食律生命」の理念の下に、医学と連携した基礎及び臨床実践栄養学研究を推進するとともに、栄養学を通して人々の食生活を改善し、健康の維持増進に資することができる人材を育成する。特に、①医学に立脚した栄養学を理解し、予防及び治療医学との密接な連携の下に医療の一翼を担う管理栄養士、②栄養施策を企画し、栄養指導者として行政、保健所、学校、事業所などの公衆栄養分野で、国内外において社会に貢献する栄養指導者、③栄養学分野(食品、医薬品関連分野を含む。)における研究・教育機関の研究教育者に必要な基礎学力を養うことを目的としている。
- 2 この目的のために栄養学科では、平成18年度からの管理栄養士国家試験制度の変更(免除科目廃止)及び平成17年度からの栄養教諭免許状取得用カリキュラムの導入に対応して、年次別に新カリキュラムに移行し、問題解決型授業の推進、参加型栄養学実習の充実や卒業研究指導の徹底を図っている。さらに、研究に対する意識が高い学生が栄養生命科学教育部に進学しやすい環境整備を進めている。
- 3 本学部教務委員会や本学部教育支援センター運営委員会において、医学科及び保健学科と連携して学生教育を行っている。

### 【保健学科】

- 1 保健学科では、人間性・協調性を有し、科学性・国際性を基盤に、我が国における高

高度化・専門化する医療を支え、保健・医療・福祉において多様化するニーズに対応できる有能な医療技術者を育成することを目的とし、その実現のために、人間尊重の倫理に立脚した高い使命感を持ち、高度の専門知識・技術を基にチーム医療、地域医療及び国際協力に貢献できる人材の養成を行っている。

- 2 保健学科の看護学専攻、放射線技術科学専攻、検査技術科学専攻において、3つの専攻の学生が共通に受講できる科目を多く設け、医療と保健・福祉を総合的に修得できるよう工夫している。平成18年度から教育課程を改訂し、社会的ニーズや医療技術革新に対応したカリキュラムの充実を図っている。平成19年度からは人間力向上を目的とした共通教育科目を新設し、さらに、平成20年度以降の接遇能力・臨床技能試験の実施に向け、作業部会を設置して検討を行っている。
- 3 保健学科看護学専攻において実施してきた助産師教育については、平成18年4月に1年制の助産学専攻科を国立大学で初めて設置して教育課程を移行し、看護教育課程を終えた者を対象として助産実践に必要な知識と技術の体系的な教育を目指している。助産学専攻科の学生定員は、保健学科での選択科目履修による助産師教育が並行して実施される平成20年度までは10名である。

#### [想定する関係者とその期待]

国民、健康生命科学系研究者・技術者や医療人を必要とする生命科学界・医学界・健康福祉界や公的機関に属する関係者を想定している。また、急速に進歩する生命科学研究の担い手や医療の高度化に寄与しうる指導的医療人として、生命科学の進歩と国民の健康・福祉・教育に寄与する優秀な人材を育成・輩出することが期待される。

## II 分析項目ごとの水準の判断

## 分析項目 I 教育の実施体制

## (1) 観点ごとの分析

**観点 基本的組織の編成**

(観点に係る状況) 本学部は、医学科、栄養学科、保健学科の3学科で構成され、学生定員、教員の配置については、大学情報データベース(資料 A2-2007 入力データ集:NO.2-1 専任教員, 資料 A2-2007 入力データ集:NO.3-1 学生(年次別))のとおりである。本学部の基礎的組織は、教育目的を達成する上で適切な編成となっている。

各学科における特徴を以下に説明する。

**【医学科】**

専任教員の他に、非常勤講師 282 名を配置し、教育の充実を図るとともに、臨床実習には附属病院所属の教員の他に、学外の臨床教授 113 名、臨床准教授 2 名(平成 19 年度)も参加している。各分野に学部教育業務を中心になって担当する「教育主任」を任命している。

**【栄養学科】**

専任教員の他に、非常勤講師 19 名を配置し、教育の充実を図っている。なお、学部教育において7分野は、基礎予防栄養学講座と臨床実践栄養学講座の2大講座を構成する。

**【保健学科】**

専任教員の他に、非常勤講師は、学科共通 9 名、看護学専攻 9 名、放射線技術科学専攻 7 名、検査技術科学専攻 10 名を配属している。臨床実習には、附属病院所属の教員のほかに、学外の臨床教授 3 名も参加している。

**観点 教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制**

(観点に係る状況) 本学部では、教務委員会に共通教育部会、PBL(Problem Based Learning) チュートリアル部会、全国共用試験及び臨床実習入門部会、臨床実習及び実践医学実習部会、卒業試験・重点セミナー(総合医学・医療)部会などを設け、教育の推進・改善に取り組んでいる。特に、カリキュラムの改善は、教務委員会のカリキュラム及びシラバス改革部会が、隔週で会議を開き、これに取り組んでいる。

さらに、教育内容、教育方法の改善に向けて、平成 14 年度に本学部教育支援センターを設置し、兼任の教員 4 名と事務補佐員 2 名を配置している。このセンターにおいて、PBL チュートリアル教育の支援、全国共用試験(CBT, OSCE)の支援、教育改善のための学生アンケート及び分析を実施している。

ファカルティ・ディベロップメント(FD)は本学部教育支援センターと本学部 FD 委員会が協力しながら随時に計画し、実施している。(表 1)

教員に対しては、その教育内容・方法について学生アンケートによる学生評価を実施し、ベストティーチャーを選び、毎年表彰している。

表1 FDの実績

年 度	タイトル	日 付
平成 16 年度	チューター養成 FD	平成 16 年 6 月 16 日, 8 月 26 日, 12 月 7 日 (計 3 回)
平成 17 年度	チューター養成 FD	平成 17 年 4 月 13 日, 8 月 23 日, 11 月 29 日 (計 3 回)
	クリニカルクラークシップ指導者養成講習会	平成 18 年 1 月 10 日～11 日, 3 月 28 日 (計 2 回)
	医学教育ワークショップ	平成 17 年 12 月 24 日 (計 1 回)
	カリキュラム改訂ワークショップ	平成 17 年 9 月 26 日, 平成 18 年 3 月 31 日, (計 2 回)
平成 18 年度	チュートリアルシナリオ作成ワークショップ	平成 18 年 8 月 7 日 (計 1 回)
	クリニカルクラークシップ指導者養成講習会	平成 18 年 5 月 30 日～31 日, 8 月 30 日 (計 2 回)
平成 19 年度	PBL チュートリアル講習会	平成 19 年 7 月 11 日 (計 1 回)
	クリニカルクラークシップ指導者養成講習会	平成 19 年 7 月 25 日 (計 1 回)
	医学研究実習 (研究室配属) に関する教員 FD	平成 19 年 9 月 6 日 (計 1 回)

学科ごとの特徴, 具体例については, 以下のとおりである。

#### 【医学科】

教育の質の向上, 研究マインドの育成のためにカリキュラムの改善を行った結果, 最近 4 年間の国家試験合格率 (平均) は新卒者 93.2%, 既卒者 52.6%であった。また, 平成 18-20 年度の現代 GP プログラム「医療系学生の保育所実習による子育て支援」と平成 18 年度大学教育の国際化推進プログラムが採択されたことにより, カリキュラムが充実された。

カリキュラムの改善に向けて, 教務委員会の「カリキュラム及びシラバス改革部会」が隔週で会議を開き, 平成 19 年度を移行年度, 20 年度を新カリキュラムの実施年度として進行中である。

#### 【栄養学科】

管理栄養士国家試験制度の変更 (免除科目廃止) 及び平成 16 年度からの栄養教諭資格用カリキュラムの導入に伴うカリキュラム改革を実施し, 結果としての 4 年間の国家試験合格率 (平均) は 95.1%程度を維持している。また, 大学院進学者も卒業生の 1/3 以上を確保している。

#### 【保健学科】

教育内容及び方法の改善に組織的に取り組み, カリキュラム改革や教員の FD 活動を積極的に実施している。医療技術者としての接遇能力向上を目的とした教育プログラムを独自に企画, 実施し, 高く評価されている。

具体的事例として, 平成 19 年度に医療技術者としての接遇能力向上を目的とした教育プログラムを企画し, 保健学科教務委員会に専門部会を設け, 平成 20 年度からの接遇能力・臨床技能試験の実施に必要な具体的事項の検討を行っている。この課題は, 教育改革支援事業として平成 19 年度学内パイロット事業支援プログラムに採択され, 平成 19 年度後期には学科共通の臨床技能試験を試行した。検討の取組は, 体系的な臨床技能向上のための体制構築に結びついた。

本学部では, 以上のように, 教育内容, 教育方法・指導の改善体制を整備した結果, 改善・向上を図ることができた。

## (2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準にある。

(判断理由) 本学部として、教育目的を達成するために教員及び組織の編成が適切になされている。さらに、教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制では、本学部教育支援センター、教務委員会及びFD委員会等が連携するとともに、学部全体で改善を図る体制及び教育の異なることを配慮した学科ごとに取り組む体制の2つの体制で、教育の改善を強化していることから、期待される水準にあると判断する。

## 分析項目Ⅱ 教育内容

### (1) 観点ごとの分析

<b>観点 教育課程の編成</b>
-------------------

(観点到に係る状況) 本学部の教育課程は、教養教育を行う共通教育とその後の専門教育から編成されている。さらに、専門教育は基礎系科目と臨床・専門科目に分かれており、講義、演習、臨床実習及びインターンシップとが効果的に編成されており、本学部の教育課程は、教育目的を達成する上で適切な編成となっている。

共通教育においては、基礎生物学、学部開放科目を本学部の教員が担当しており、共通教育と専門教育の連携に特色を持たせている。なお、卒業に必要な総単位数は医学科 204 単位、栄養学科 127 単位、保健学科看護学専攻 125 単位、放射線技術科学専攻 132 単位、検査技術科学専攻 127 単位である。

以下に、学科ごとの教育課程の特徴を述べる。

#### 【医学科】

平成 19 年度入学生から適用した医学科新カリキュラム(表 2)では、1 年次前・後期で共通教育を行う。早期に先端医学・臨床医学に触れさせるために、共通教育の中に、1 年次に教養科目群の 1 科目の生命・健康・病気の授業を、1 年次及び 2 年次に医学入門(医学概論、医と法など)の授業を設けている。

専門教育において、2 年次と 3 年次 12 月までを基礎医学教育、3 年次 1 月以降を臨床医学入門、PBL チュートリアル教育を含む系統別講義、臨床実習としている。また、学生の医学英語の能力向上のために、2-4 年次に外国人教員による授業を実施している。なお、3 年次の午後は 1 年を通じて医学研究実習(ヘルスバイオサイエンス研究部研究室への配属)とし、5 年次前期から開始するクリニカルクラークシップ前には約 8 週間の臨床体験実習を設けている。

表2 医学科新カリキュラム（平成19年度入学）

	4-7月（15週）	9-12月（16週）	1-3月（11週）
1年次	教養科目群・基盤形成科目群 基礎生物学/基礎化学/基礎物理学/ 基礎数学 医学入門		
2年次	医学入門 生理学 解剖学	医学入門 生理学 医学英語 解剖学	生化学 免疫学/寄生虫学 細菌学 ウイルス学 薬理学
3年次	医学入門 病理学 生理学 医学英語 実験動物学 薬理学 医学研究実習	法医学・衛生公衆衛生学 人類遺伝学・実験動物学 医学研究実習	臨床医学入門 医学研究実習
4年次	系統別病態診断（PBLチュートリアル・臓器疾患別講義） 医学英語	臨床実習入門Ⅰ OSCE	臨床実習入門Ⅰ OSCE
5年次	臨床実習入門Ⅱ 臨床体験実習（学内+学外）	臨床実習 クリニカルクラーク シップ	
6年次	Advanced OSCE	卒業試験 重点セミナー	国試

解剖学：組織学実習は2年次4-7月，系統解剖実習は2年次9-12月

2-3年次の医学入門：生命・健康・病気(2)，医学概論，医学心理学，医と法，放射線医学，医学英語，実験動物学

### 【栄養学科】

栄養学科の新カリキュラムでは全学共通教育を2年次までに終了するとともに，1年次から専門科目も同時に実施している。この科目編成により，教育の効率化を図り，一般的教養・見識，総合判断力，課題探求能力及び問題解決能力の養成と管理栄養士としての基礎的・共通の技能及び知識の修得がバランスよく達成できるように工夫した。また，2年次からは栄養教諭免許状取得用カリキュラムを導入し，栄養教諭の免許状取得を目指す学生の便宜を図っている。

### 【保健学科】

保健学科では，教育目的に沿った系統的かつ実践的な教育課程を編成している。1年次から共通教育と並行して専門教育を融合的に実施し，教養を深めると同時に専門能力育成

のための基盤構築を図っている。系統的に専門性を深めることができるよう、科目の関連性に従い1年次から順次、専門科目の講義、演習、実習及び臨地・臨床実習を配置している。4年次には卒業研究を実施し、専門領域の深化を図っている。学年ごと進級要件を定め、系統的かつ段階的な知識や能力の獲得を図っている。なお、少数の不足単位により留年した学生に対し、授業内容によっては上級学年の授業科目の履修を認め、計画的な履修を個別に指導している。

### 観点 学生や社会からの要請への対応

(観点に係る状況) 本学部では、学生及び社会からの要請に対応するために、教員と学生との懇談会、徳島大学関連病院長との懇談会、徳島大学関連病院での臨床実習及び病院見学・企業訪問を実施している。特に社会からの要請に対して、社会人の専門教育として3年次編入を行っている。

以下に、学科ごとの対応の特徴を述べる。

#### 【医学科】

社会からの要請である医学教育改革に対応するために、カリキュラム改革を持続的に行っている。少人数教育としてPBLチュートリアル教育を開始するとともに、学生の要請に対応して、自習室としてチュートリアル室の24時間の使用を認めた。3年次の医学研究実習、6年次の実践医学実習(新カリキュラムでは5年次の臨床体験実習)の時期に外国での実習を認めており、毎年3-4名がこの制度を利用している。また、医学研究実習では学生の希望により学内共同利用施設である疾患酵素学研究センター、ゲノム機能研究センター及び他学部での実習を可能とし、実践医学実習では学外関連病院での臨床実習を体験することができるようにしている。

教員と学生との懇談会を年に数回開催するとともに、学生による授業評価を実施しており、学生の要望を聴いてこれを教育の改善に取り入れている。ヘルスバイオサイエンス研究部医療教育開発センターを中心に、模擬患者(SP)の養成に取り組んでいる。さらに、平成20年度から新設の地域医療学分野が中心になって5-6年次の臨床実習クリニカルワークショップの中で地域医療学実習を開始する。これは県南の県立病院に学生10人ずつが週3日間、教員と共に出向き、診療に参加することによって、徳島大学附属病院とは異なる経験をさせて地域医療を考えさせるものである。

#### 【栄養学科】

管理栄養士国家試験制度の変更(免除科目廃止)及び平成16年度からの栄養教諭資格用カリキュラムの導入に伴うカリキュラム改革を実施した。3年次学生の希望者に対して企業、研究所訪問見学を実施することにより、就職への意識を高めている。また、平成19年度からは3年次学生に人体解剖実習見学を実施することにより、人体生理に基づいた栄養学を学ぶ意識を向上させている。

#### 【保健学科】

医療系短期大学・専修学校及び大学卒業生の専門職学士教育を行うため、3年次編入学制度を導入している。また、大学での助産師養成においては、過密カリキュラムや教育内容の質的低下の問題が生じる可能性があることから、1年制の助産学専攻科を国立大学で初めて設置し、実践能力の高い助産師養成に対する社会的要請に応えた。さらに、職業観を醸成するため、就職希望先での研修制度や夏季休業中に病院見学プログラムへ学生を積極的に参加させている。

以上のように、本学部では、学生や社会からの要請に対応した教育課程の編成に配慮している。

(2)分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準にある。

(判断理由) 教育課程は、全ての学科で1年次から専門教育に触れさせ、教養教育との融合を図り、意識改革を早期に行うという効果的なものであり、教育目的を達成する上で適切な編成となっている。

また、学生や社会からの要請への対応については、教員と学生との懇談会及び徳島大学関連病院長との懇談会等での聞き取り調査の結果を踏まえ、学科ごとに様々な取組を実施していることから、期待される水準にあると判断する。

分析項目Ⅲ 教育方法

(1)観点ごとの分析

**観点 授業形態の組合せと学習指導法の工夫**

(観点に係る状況) 本学部では、専門教育においては、基礎系科目における講義・実験、臨床・専門系科目における講義と演習・病院実習及びインターンシップが組み合わされている。講義においては、無線LANを配備し、オンデマンドの情報収集に対応している。臨床実習前に技術・態度の教育を充実させるために、臨床技能学習施設としてクリニカルスキルラボラトリー(以下「スキルラボ」という。)を設置し、シミュレータを用いた教育を開始するとともに、独自に模擬患者(SP)を養成し、学生が患者に接する前に、模擬患者でコミュニケーション技術や態度の習熟が可能なように教育を充実させた。

本学部としての学習指導法の工夫の具体例については、表3のとおりである。

表3 授業形態及び学習指導方法一覧

学部	学科等	開講科目数	授業形態別科目数				少人数授業	対話・討論形式	フィードバック型	メディア利用	情報機器利用	TA活用	ゼミナール形式	チュートリアル形式	その他の工夫
			講義	実験	演習	実習									
全学共通教育		711	399	11	308	80	355	7	25	291	58	59	36		12
医学部	医学科	11	9		6	8	4	1			3			1	1
	栄養学科	55	31	3	3	18	3	1	1	21	10	7	2	9	
	保健学科(看護学専)	84	70		19	16			1					15	
	保健学科(放射線技術科学専攻)	87	62	2	12	21			1		1			1	
	保健学科(検査技術科学専攻)	73	53	5	5	19			1					1	

【医学科】

3-4年次の系統別病態診断に少人数教育として週3回のPBLチュートリアルを実施してきた。5-6年次の臨床実習は参加型(クリニカルクラークシップ)としている。スキルラボを設置してシミュレータを用いた教育を充実させ、診療技術の向上を図っている。平成19年度に医学科はスキルラボを授業で72回、自主学習で81回使用した。

【栄養学科】

学習指導法の工夫のひとつとして、特定の授業で少人数教育を重視し、チュートリアルを設けている。臨床栄養学の教育実習には、附属病院を利用している。また、栄養管理の実習には附属病院栄養管理室の協力を得ている。魅力ある大学院教育イニシアティブ「食品機能研究を先導する人間栄養学教育拠点」と連携して学部・大学院連携授業及び就職支援を実施している。産業界から、食品開発、食品素材開発の担当者を講師として、「先端栄養科学特論」を開講しており、同時に各企業の就職担当者による「企業が望む人材」に関する就職支援セミナーを開催した。

管理栄養士国家試験制度の変更に伴い、教育内容を大きく見直した。新しい授業科目と

して、栄養教育論、栄養指導論、臨床栄養学、給食管理論、ライフステージ栄養教育論を組み入れた。さらに、食育を専門に行う管理栄養士の育成を目指し、栄養教諭免許状資格取得のためのカリキュラムを導入した。栄養教諭免許状資格の取得のため、22単位を授業科目に加えた。特に、免許状の取得を目指す学生には、4年次に栄養教育実習を加え、小学校／中学校における授業体験を必修とした。さらに、食育の重要性を認識させる目的で、学校栄養指導論、学校食生活指導論を開講した。

#### 【保健学科】

グループ学習・演習発表によるフィールド型授業を取り入れている。また、コンテンツ管理システムや医学ビデオ教材配信システムなどを積極的に活用している。シラバスは、Webによる更新登録システムを利用して作成され、学生はインターネットを利用して学内外から閲覧できるようになっている。

以上のように、本学部では、教育目標を達成するため、講義、演習、実験、実習等の授業形態のバランスを図り、教育内容に応じた適切な学習指導法の工夫を行っている。

### 観点 主体的な学習を促す取組

(観点に係る状況) 本学部では、少人数教育、eラーニング、スキルラボ実習を取り入れ、自学自習を促すとともに、課題研究、研究室配属を実施している。

以下に、各学科の具体的な取組を述べる。

#### 【医学科】

3-4年次の系統別病態診断に少人数教育による問題解決方学習（PBL チュートリアル）を実施している。Webを用いたシナリオのブラッシュアップシステムの構築、チューターによる評価・試験成績の分析による学習困難者のピックアップを指導している。また、学生の学習時間などを定期的に調査し、自己学習推進の参考にするとともに、チュートリアル室を夜間・休日もグループごとに学生の自主管理で自習室として利用させている。

チュートリアル室のパソコンを新規購入し、インターネットを利用した学習環境を整備して、インターネットによる電子医学教科書「Up To Date」を契約することにより、学生が医療に関する最新情報を入手できるようにしている。

スキルラボでのモデルシミュレーション教育は、自学自習が可能であり、医療技術習得に効果を上げている。授業アンケートを定期的に行い、教員にフィードバックしている。

#### 【栄養学科】

少人数制の「セミナー授業」が設定されており、3年次の学生に対して3-5名程度の学生を各教員が担当して、大学教育における基本的な知識の修得と研究方法の基礎的な知識を修得させている。栄養学科実験研究棟2階に学習支援室を設置しており、多くの学生が利用している。自己学習用の教育図書も栄養学科実験研究棟2階図書室で閲覧可能である。

#### 【保健学科】

学生に予習をして授業に臨むよう指導し、学生の過負担とならないようバランスを教員間で配慮して課題を与えている。情報実習室や自習室、スキルラボだけでなく、eラーニングを導入し、自宅等の学外からもWeb教材学習システム及びコンテンツ管理システムを活用した自己学習ができる環境を整備し、学生の主体的な学習促進や授業時間外の学習時間の確保による単位の実質化に効果を上げている。

以上のように、教育目的を達成するため、学生の主体的な学習を促す適切な取組を行っている。

## (2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準にある

(判断理由) 授業形態の組合せと学習指導法の工夫は、講義と演習・臨床実習及びインターンシップが適切に組み合わせられており、PBL チュートリアル、クリニカルクラークシップ及びグループ学習・演習発表によるフィールド型授業など授業の工夫も怠っていない。

また、主体的な学習を促す取組についても、図書館、チュートリアル室は自習室として頻繁に利用されており、スキルラボ、IT機器を活用した自己学習システムの活用も効果を上げており、学生の主体的な学習を促す適切な取組は、期待される水準にあると判断する。

## 分析項目Ⅳ 学業の成果

### (1) 観点ごとの分析

#### 観点 学生が身に付けた学力や資質・能力

(観点に係る状況) 本学部では、教育目標を達成するために編成された教育課程を履修し、単位を修得していることに加え、医療・栄養・福祉に係る教育、研究、診療を通じて、社会に貢献できる人材育成を目的とし、チーム医療への対応、臨床技能の向上(スキルラボ、SPの活用)、自学自習の促進などに取り組んでいる。その結果、学生の受賞数(表4)、国家試験の合格率は高い水準にあり(資料 A2-2007 入力データ集:NO.4-6 学生(取得資格))、目的とする人材の養成に対応しているものと判断される。

表4 学生が受けた賞と人数

年度	平成 16 年度	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度
康楽賞	2	2	2	3
優秀学生賞	4	3	1	2
中田賞	1	1	1	1
児玉賞	1	1	1	1
看護学専攻賞	—	1	1	1
藤田賞	—	1	2	1
すだち賞	—	1	1	1

- ・康楽賞は、財団法人康楽会様のご厚意により、研究成果のある学業成績が優秀な本学学生に対し、昭和 26 年から康楽賞を贈与されている。
- ・優秀学生賞は、各種活動等において顕著な功績があった学生又は団体を表彰する。中田賞は、初代徳島大学長の中田先生から寄贈された基金で創設されている賞で、医学科学生で成績優秀な卒業生に授与される。
- ・児玉賞は、元徳島大学長の児玉先生から寄贈された基金で創設されている賞で、栄養学科学生で成績優秀な卒業生に授与される。
- ・看護学専攻賞は、保健学科看護学専攻の学生で、人物・学業において優秀な卒業生の方に授与される。
- ・藤田賞は、元徳島大学医療技術短期大学部診療放射線技術学科教員の藤田先生のご厚意で設けられている賞で、学業において優秀な成績を修めた保健学科放射線技術科学専攻の卒業生に授与される。
- ・すだち賞は、元徳島大学医療短期大学部衛生技術学科教員の喜多先生、磯部先生、中村先生から寄贈された機器によって創設された「すだち会」からの賞で、保健学科検査技術科学専攻の成績優秀な卒業生に授与される。

以下に、学科ごとの分析結果を述べる。

【医学科】

参加型臨床実習は、臨床能力の向上に寄与している。平成 18 年度よりクリニカルクラークシップ終了時点で、Advanced OSCE を実施し、臨床推論を含めた診療技能の評価を行っている。その結果、基本的な臨床能力及び医学研究能力を備え、急速な医学・医療の進歩や地域医療の発展に寄与し得る医師及び医学研究者の養成に効果を上げている。

医師国家試験合格状況は表 5 のとおりである。

表 5 医師国家試験合格率

区分	平成 16 年度	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度
受験者数	108	89	105	104
合格者数	102	76	91	92
本学合格率	94.4% 新 98.0% 既 60.0%	85.4% 新 88.0% 既 50.0%	86.7% 新 91.3% 既 53.8%	88.5% 新 95.5% 既 46.7%
全国合格率	89.1%	90.0%	87.9%	90.6%

新：新卒，既：既卒

【栄養学科】

栄養学科の学生の進級状況は 100%に近い。管理栄養士国家試験の合格率は最近 4 年間の平均で 95.1%（全国平均 29.7%）に達し、十分な成果が得られている（表 6）。以上の状況は、医療の一翼を担う管理栄養士、国内外において社会に貢献する栄養指導者、教育研究者に必要な基礎学力を養成する目的を十分達成している。

表 6 管理栄養士国家試験合格率

区分	平成 16 年度	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度
受験者数	56	52	52	47
合格者数	55	50	47	45
本学合格率	98.2%	96.2%	90.4%	95.7%
全国合格率	25.3%	26.8%	35.2%	31.6%

【保健学科】

進級及び卒業状況は良好である。平成 16 年度から平成 18 年度までの入学者の留年率（留年者数/入学者数）の範囲は 6.1-9.4%であり、留年の理由は、海外留学、成績不振、進路変更などである。保健学科の国家試験合格状況については、看護師、保健師、助産師、診療放射線技師及び臨床検査技師の各国家試験合格率は、表 7 のとおりであり、教育の成果や効果が上がっていると判断できる。

保健学科の教育目的である、人間性・協調性を有し、科学性・国際性を基盤に、我が国における高度化・専門化する医療を支え、保健・医療・福祉において多様化するニーズに対応できる有能な医療技術者の育成に成果や効果が上がっていると判断できる。

表 7 保健学科の国家試験合格率

区 分	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度
看護師	98.5%	100.0%	96.9%
保健師	81.3%	100.0%	98.6%
助産師	94.7%	100.0%	100.0%
診療放射線技師	94.1%	91.4%	94.4%
臨床検査技師	100.0%	100.0%	100.0%

以上のように、学生が身に付けた学力、資質、能力及び養成しようとする人材像に照らして、教育の成果・効果があったものとする。

### 観点 学業の成果に関する学生の評価

(観点に係る状況) 本学部では、各科目にて最終授業時に実施する授業評価、学生アンケート、学生懇談会の結果において、9割以上の学生が5段階評価の3以上と高い授業満足度が示されており、将来にも役立つと評価されている。(別添資料1:「2007年前期授業評価アンケート集計結果」)

以下に、学科ごとに説明する。

#### 【医学科】

定期的な学生との懇談会の内容及びアンケート調査の結果を教員に知らせることによって教育方法の改善を図っている。授業に対する学生の満足度(目標が提示されている、重要事項が強調されている、授業の工夫がされている)は高く、学生の75.8%は授業内容が将来役立つものと考えている。しかし、37.3%の学生が予習・復習時間は十分ではないと自己評価している。

#### 【栄養学科】

授業評価アンケートを実施し、学生自身の努力度、達成度を評価している。学生の78.8%は授業内容が将来役立つものと考えている。しかし、32.8%の学生が予習・復習時間は十分ではないと自己評価している。この結果を担当教員に知らせることによって教育方法の改善を図っている。

#### 【保健学科】

学科設置時から継続的に、専門教育科目又は授業担当教員ごとの授業評価アンケートを実施しており、授業内容の理解度、満足度等を検証している。各専攻で学生の65-76%は授業内容が将来役立つものと考えている。しかし、30-40%の学生が予習・復習時間は十分ではないと自己評価している。

以上のように、学生に身に付けさせた学力、資質、能力及び養成しようとする人材像に照らして、教育の成果・効果があったと判断される。

## (2)分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準にある

(判断理由) 本学部では、学生が身に付けた学力、資質、能力は、教育目標を達成するために編成された教育課程で単位を修得しており、各種国家試験に高い合格率を保持している。また、授業評価、学生アンケート、学生懇談会の結果において、高い授業満足度が得られていることから、期待される水準にあると判断する。

## 分析項目Ⅴ 進路・就職の状況

### (1)観点ごとの分析

#### 観点 卒業(修了)後の進路の状況

(観点に係る状況) 学生の卒業後の進路・就職の状況は、大学情報データベース(資料A2-2007 入力データ集:NO.4-8 就職者(職業別))のとおりである。その多くが、医療関係機関に就職するとともに、高度の専門知識と技能を身に付けることを目的として、大学院へ進学している。

以下に、学科ごとの特徴を述べる。

【医学科】

卒業生はそのほとんどが初期臨床研修を受けており、少数が附属病院で、多くがその他公立病院等で2年間研修している。

【栄養学科】

卒業生はそのほとんどが管理栄養士資格を取得するとともに、病院や县市町村に栄養士や栄養指導員として就職している。また、食品・製薬関連企業に研究職や総合職として採用されている。さらに卒業生の1/3以上は本学を含む大学院博士前期課程に進学している。

【保健学科】

看護学専攻では、就職希望学生のほぼ100%が病院に就職し、看護師としてだけでなく、一部は保健師、助産師として勤務している。

放射線技術科学専攻では、ほとんどの卒業生が診療放射線技師として病院に就職し、一部の卒業生は、医療機器企業へ就職している。学生一人当たりの求人は6.5施設である。

検査技術科学専攻では、就職希望学生は臨床検査技師として病院へ就職している。また、大学院等への進学率も高いという特徴がある。

また、平成18年度及び平成19年度に、看護学専攻では0名及び2名、放射線技術科学専攻では5名及び4名、検査技術科学専攻では3名及び2名がそれぞれ保健学系大学院へ進学している。

以上のように、学生が身に付けた学力や資質・能力及び養成しようとする人材像に照らして、卒業後の進路・就職状況から、教育の成果・効果があった。

**観点 関係者からの評価**

(観点に係る状況) 卒業生及び受入先機関にアンケートを行った結果以下のとおり、高い評価を得ている。

以下に、学科ごとに説明する。

【医学科】

附属病院卒後臨床研修センターにおいて、平成18年3月、平成19年3月に初期臨床研修後の評価がなされている。これによると、附属病院医師卒後臨床研修管理委員会により合計37名の本学卒業生について、未修了の1名を除いて、全員が臨床医として適格であると判定されている。

平成20年1月に徳島大学関連病院長にアンケート調査を依頼し、本学出身者の評価を聞いたところ、初期臨床研修医については100%（8病院中8病院）が5段階評価の3（普通）以上と評価され、後期研修医については94%（16病院中15病院）が5段階評価の3（普通）以上と評価されている。（別添資料2：「アンケート結果の集計」）

【栄養学科】

平成19年度に実施した就職先等からのアンケート調査（表8）では、各質問の平均が非常に満足49.7%、満足42.4%に対し、やや不満3.6%、不満0%との回答であり、高く評価されている。

表8 上司・雇用者へのアンケート(55名)

	非常に満足	満足	普通	やや不満	不満
全般的な満足度	33(60.0%)	18(32.7%)	2(3.6%)	2(3.6%)	0
知識・能力	18(32.7%)	32(58.2%)	3(5.5%)	2(3.6%)	0
人間性・態度	31(56.4%)	20(36.4%)	2(3.6%)	2(3.6%)	0

**【保健学科】**

卒業生就職先の関係者に聞き取り調査を実施したところ、看護学専攻においては、論理的思考や記述において特に優れているとの良い評価を受けた。放射線技術科学専攻においては、仕事への対応力がある、知識が豊富である、ルーチンの仕事のみならず研究にも熱心である、などの良い評価を受けた。検査技術科学専攻においては、基礎学力がある、業務に熱意がある、研究にも熱意がある、などの良い評価を受けた。聞き取り調査の結果から、卒業生は優れた医療技術者として活躍しており、保健学科の設置理念に沿った教育の成果・効果が上がっている。

以上のように、学生に身に付けさせた学力や資質・能力及び養成しようとする人材像に照らして、教育の成果・効果があったと判断される。

**(2)分析項目の水準及びその判断理由**

(水準) 期待される水準にある。

(判断理由) 卒業後の進路の状況は、大学院進学を除き、ほとんどの学生が医師、管理栄養士、看護師、診療放射線技師、検査技師等として就職しており、医療関係者からの評価も高いことから、期待される水準にあると判断する。

### Ⅲ 質の向上度の判断

#### 【医学科】

##### ①事例1「教育の実施体制」(分析項目Ⅰ)

(質の向上があったと判断する取組) 本学部教育支援センターに関わる教員を教授2, 講師2, 助教1(いずれも兼任)に増やし, うち, 講師1は専任として, 教育支援や分析に当たるようにした結果, 授業評価, PBL チュートリアル, 研究室配属及びクリニカルクラークシップなどの新しい取組に迅速できめ細かな対応ができた。

##### ②事例2「教育内容」(分析項目Ⅱ)

(質の向上があったと判断する取組) 教育内容の改革を不断に行っており, 平成19年度から新カリキュラムに移行し, 医学研究実習の長期化による研究マインドの育成, PBL チュートリアル教育の充実, 2-4年次に外国人教員による医学英語授業の実施, 参加型臨床実習の推進を図ったことで, より教育効果が上がるカリキュラムになったと判断する。

##### ③事例3「教育方法」(分析項目Ⅲ)

(質の向上があったと判断する取組) 臨床実習前に技術・態度の教育を充実させるために, スキルラボを設置してシミュレータ教育と模擬患者を利用したコミュニケーション技術や態度教育を充実した。また, Webを用いたPBL チュートリアル教育のシナリオのブラッシュアップシステムの導入, チューターによる評価・試験成績の分析による学習困難者の指導体制を構築した。少人数教育の質の向上が図れたと判断する。

#### 【栄養学科】

##### ①事例1「教育内容」(分析項目Ⅱ)

(質の向上があったと判断する取組) 管理栄養士国家試験制度の変更に伴い, 教育内容を大きく見直すとともに栄養教諭免許状の取得のためのカリキュラムを導入した。特に, 免許状取得を目指す学生には, 小学校/中学校における授業体験を必修とした。さらに食育の重要性を認識させる目的で, 学校栄養指導論, 学校食生活指導論を開講した。

##### ②事例2「教育方法」(分析項目Ⅲ)

(質の向上があったと判断する取組) 魅力ある大学院教育イニシアティブ「食品機能研究を先導する人間栄養学教育拠点」と連携して学部・大学院連携授業, 就職支援への取組を行った。具体的には企業の研究者6名の講演を行い, 学生との質疑応答を行うことにより, 勉学意識を高めることに成功した。

#### 【保健学科】

##### ①事例1「教育の実施体制」(分析項目Ⅰ)

(質の向上があったと判断する取組) 平成18年度から教育課程を改訂し, 社会的ニーズや医療技術革新に対応したカリキュラムの充実を図った。平成19年度からは人間力向上を目的とした共通教育科目を新設し, さらに, 平成20年度以降に接遇能力・臨床技能試験の実施を計画している。以上の改革は教務委員会及び必要に応じて作業部会を設置して具体的な検討を行っており組織的な実施体制に基づいた教育改善の取組による実績を重ね, 教育の実施体制の質が向上している。

##### ②事例2「教育内容」(分析項目Ⅱ)

(質の向上があったと判断する取組) 平成18年度の新カリキュラム導入により, 共通教

育と並行して専門教育を融合的に実施するとともに、学科共通科目の見直しを行った。系統的な専門能力育成のための基盤構築に効果が上がり、教育内容の質が向上した。平成 19 年度において、薬学部、医学科、保健学科看護学専攻の学生が合同で受講する科目「チーム医療入門」を開講した。将来、医療現場での医療チームとしての実践に大きく役立つこととなる。

③事例 3 「教育方法」(分析項目Ⅲ)

(質の向上があったと判断する取組) シラバスの電子化やインターネット配信によるデジタルコンテンツの充実を図り、学習環境が改善した。また、主体的な自己学習を促すための指導や eラーニングを活用した自習システムの導入が実質的に効果を上げている。これらにより、教育方法の質が向上した。